



ふくい ひろき
福井 裕輝氏

性障害専門医療センター代表理事

恨みの中毒状態 「ストーカー病」

ストーカー重大事案が連鎖している。群馬県館林市では、被害者が銃で射殺された後に、加害者が銃部に銃弾を二発撃ち自殺するという事件が起きた。こうした事件を防ぐためには、被害者支援のさらなる充実とともに、警察には適切な対応が求められる。法改正も必要となるだろう。

しかしながら、それだけではストーカー重大事案を防ぐことはできない。警察の警告などで、ストーカー行為の約八割は収まる。だが、一割は、変わらず続けるか、逆上して一層激しい行動を取る。長崎、逗子ストーカー殺人事件は、いずれもそうだ。全面

1969年生まれ。
京都医療少年院、国立精神・神経医療研究センターなどを経て現職。
精神科医

的に警察などの刑事司法に委ねるのは危険なのである。

これまでに私は、警察庁からストーカー等の被害者・加害者に関する三千件近いデータの提供を受け、解析を行った。また、百人近くのストーカー加害者治療

医学・心理的治療すべきだ

に携わってきた。そこから見えてくる加害者の精神病理は、非常に似通っている。揺るぎなき被害者感情、激しい思い込み、愛憎入り交じった執拗さ、飛躍した衝動性などが、一貫しているのだ。

私はそれに、「ストーカー病」という名称をつけた。彼らは、自己愛が強く、心に痛みを抱え、相手に不幸を与えようとする。感情

の整理が苦手で、切り替えができない。そのことで「恨みの中毒状態」となっている。線条体および前帯状皮質と呼ばれる脳部位の障害が関与していると推定される。

昨年十月に、東京都三鷹市井の頭で起きたストーカー

殺人事件の被疑者も、ストーカー行為は犯罪であることを認識した上で、執着心を絶つことができず、愛情と憎悪の間で葛藤し、行

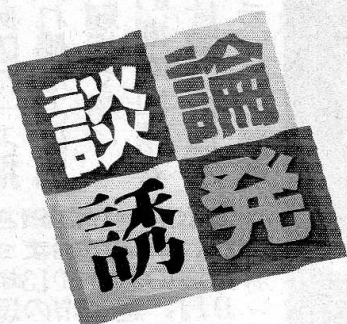
動をコントロールできなかったと述べている。この被害者もまた、ストーカー病であったと推察している。では、いかにストーカー病者による重大事件を防ぐのか？

彼らには、医学・心理学的治療を施すしかない。認

知行動療法・弁証法的行動療法などの精神療法や、一部には抗精神病薬などの薬物療法が有効だ。多くのストーカー病は治療可能なの

だ。事実、米国、英国などにおいては、加害者に治療を行うのがスタンダードである。

こうした実情を受けて、新年度から警察庁が、加害者に対して治療を促す試みを始めようとしている。まずは東京都を中心として行われるが、数年後には全国に広がるのが望ましい。刑事司法と精神医療は、考え方もアプローチの仕方とも全く違つ。お互いが補い合うことで、解決の道が開ける。被害者をなくすためには、加害者をなくすしかないのである。



女子学生が殺害された事件がきっかけで、2012年のストーカー規制法は①しつこい行為に追加②被害者の住所の警察も警告しないうちに③警察が警告しない場合、理由を被害者に書面通知することが盛り込まれている。全国の被害者数は過去最高。事件への発展を防止できなかったケースも目立っている。改正ストーカー規制法は①しつこい行為に追加②被害者の住所の警察も警告しないうちに③警察が警告しない場合、理由を被害者に書面通知することが盛り込まれている。